A1201 - ②
③

① 渡航費

ご利用明細　静岡銀行

ご利用ありがとうございます。
内容をご確認いただきお持ち帰りください。

年 月 日	振替先店番・科目・口座番号
06 12 09	

振行番号	店番号	科目	口 座 番 号
0149	[redacted]	10	[redacted]

お取扱店	お取引内容	お 取 引 金 額
0361	お引出し	¥2,720,500

	おつり	残 高
		**********

キャッシング	手数料	時刻	お客さまへのお知らせ
	¥550	1443	

ミクヒ゛ジョーエフショ゛エイ
ンハ゛ンジエキマエ
普通 3578805
カ)ハンキュウハンシンヒ゛ジ゛ネストラ
いも 様
ハママツシキ゛カイシ゛ョウミンシコトウカママツ
様 TEL053-457-2495

06.520.38 ⑪　(裏面もご覧ください)

② 視察旅費 (振込)
@544,100 × 5名分
阪急阪神ビジネストラベルお
2,720,500円.

③ 振込手数料　550円.
静岡銀行 浜松営業部

A0104 - ①
②

② 現地手配費

ご利用明細　静岡銀行

ご利用ありがとうございます。
内容をご確認いただきお持ち帰りください。

年 月 日	振替先店番・科目・口座番号
07 01 21	

振行番号	店番号	科目	口 座 番 号
0149	[redacted]	10	[redacted]

お取扱店	お取引内容	お 取 引 金 額
0361	お引出し	¥162,982

	おつり	残 高
		**********

キャッシング	手数料	時刻	お客さまへのお知らせ
	¥550	0915	

ミクヒ゛ジョーエフショ゛エイ
ンハ゛ンジエキマエ
普通 3578805
カ)ハンキュウハンシンヒ゛ジ゛ネストラ
いも 様
ハママツシキ゛カイシ゛ョウミンシコトウカママツ
様 TEL053-457-2495

06.520.38 ⑪　(裏面もご覧ください)

〈現地手配費用〉
①. 現地 貸上バス (補分)
・音声ガイドシステム
5名分
162,982円
阪急阪神ビジネストラベル

② 振込手数料　550円
静岡銀行 浜松営業部

日本出国手続きの順序

保安検査場（セキュリティチェック）

ハイジャックなど危険防止のため、手荷物検査とボディチェックを行います。搭乗券を提示していただき、機内持ち込み手荷物はX線検査機にお通しください。お客様は、お一人ずつボディスキャナーまたは金属探知機のゲートをくぐり、ボディチェックをお受けください。

税関手続き

100万円相当額を超える現金などを持ち出す場合は、税関への申告が必要となります。現在使用している時計やネックレスなどの外国製品を外国に持ち出す場合は、税関カウンターで所定の手続きを行ってください。免税物品を購入した方は、税関カウンターにてパスポート等を提示してください。

出国審査

出国審査カウンターでパスポートと搭乗券を提示してください。
顔認証ゲート及び自動化ゲートを利用した場合には、パスポートにスタンプ(証印)されません。スタンプを希望される方は職員にお伝えください。
（顔認証ゲート及び自動化ゲートのご利用については、法務省のホームページをご確認ください）
※出国審査後、免税店にて酒、タバコ等お買い物ができます。

搭乗ゲートへ

搭乗券に記載されている搭乗時刻と搭乗ゲートをご確認ください。
館内の案内表示に従って、搭乗案内開始時刻までに間に合うよう、時間に余裕を持って搭乗ゲートまでお越しください。

搭乗

搭乗ゲートに到着いたしましたら、搭乗開始までお待ちください。
搭乗の際には係員の案内に従って、搭乗券とパスポートを提示してご搭乗ください。

1日目　20[illegible]4年12月22日(日)

発着地 滞在地	現地 時間	交通 機関	スケジュール
中部国際空港	08:20		中部国際空港第1ターミナル 3階 出発ロビー 旅行会社カウンター9番ご集合
中部発	10:20	SQ671	空路、シンガポールへ 【所要時間：6時間55分】
シンガポール着	16:15		乗り継ぎ
シンガポール発	18:40	SQ504	空路、アーメダバードへ 【所要時間：5時間40分】
アーメダバード着	21:50	専用バス	着後、ホテルへ ホテル着 （アーメダバード泊）

食事：朝食／－　昼食／機内　夕食／機内

お部屋番号

1/2

【メモ】

3-4

【宿泊ホテル】
ハイアットリージェンシー アーメダバード
Hyatt Regency Ahmedabad

2日目　2024年12月23日(月)

発着地 滞在地	現地 時間	交通 機関	スケジュール
アーメダバード		専用バス	ホテルにて朝食 朝、ホテル出発 午前、スズキ・モーター・グジャラート社(SMG)視察 昼食(SMG社員寮にて) 午後、マンダル工業団地視察 夕刻、国際金融技術都市(GIFTシティ)視察、夕食 ホテル到着 個人自由　(アーメダバード泊)

食事:朝食／ホテル　昼食／○　夕食／○

起床時間:　時　分
朝　食:　時　分
集合時刻:　時　分(場所:　)

日当

お部屋番号

【メモ】

【宿泊ホテル】
ハイアットリージェンシー アーメダバード
Hyatt Regency Ahmedabad

3日目　20..年12月24日(火)

発着地 滞在地	現.. 時間	交通 機関	スケジュール
アーメダバード		専用バス	ホテルにて朝食 ホテル出発 午前、アーメダバード市役所訪問 午前、グジャラート州政府訪問(調整中) - 州首相表敬訪問 - 協定締結 - グジャラート州首相主催の昼食会 午後、アーメダバード経営者協会(AMA)訪問(調整中) - ジャパンセンター視察 ホテル到着 現地関係者とのネットワーク構築会 (アーメダバード泊)

食事:朝食／ホテル　昼食／○　夕食／○

起床時間:　時　分
朝　食:　時　分
集合時刻:　時　分(場所:　)

1/2

お部屋番号

【メモ】
◎(予定)(調整中)の訪問に関しては、変更になる場合がございます。

【宿泊ホテル】
ハイアットリージェンシー アーメダバード
Hyatt Regency Ahmedabad

4日目　2024年12月25日(水)

発着地 滞在地	現地 時間	交通 機関	スケジュール
			朝食はBOX朝食をご用意
アーメダバード		専用バス	早朝、ホテル出発 アーメダバード空港到着
アーメダバード発	08:40	AI2946	空路、デリーへ 【所要時間：1時間50分】
デリー着	10:30	専用バス	デリー空港到着 午前、全日本空輸株式会社 デリー支店との意見交換会 昼食 デリー空港到着
デリー発	17:35	AI2879	空路、ハイデラバードへ 【所要時間：2時間15分】
ハイデラバード着	19:50	専用バス	ハイデラバード空港到着 ホテル到着 個人負担　(ハイデラバード泊)

食事：朝食／BOX　　昼食／○　　夕食／未定

起床時間：　時　分　　日当
朝　　食：　時　分
集合時刻：　時　分（場所：　　）

お部屋番号

【メモ】

【宿泊ホテル】
ル メリディアン ハイデラバード
Le Méridien Hyderabad

5日目　2024年12月26日(木)

発着地 滞在地	現地 時間	交通 機関	スケジュール
			ホテルにて朝食
ハイデラバード		専用バス	午前、ホテル出発 インド工科大学ハイデラバード校 - スズキイノベーションセンター視察 - 覚書締結式 昼食(学内ゲストハウス)(予定) 午後、アップパールスタジアム視察 夕食 ホテル到着 (ハイデラバード泊)

食事：朝食／ホテル　　昼食／○　　夕食／○

起床時間：　時　分　　1/2
朝　　食：　時　分
集合時刻：　時　分（場所：　　）

お部屋番号

【メモ】

【宿泊ホテル】
ル メリディアン ハイデラバード
Le Méridien Hyderabad

6日目　2024年12月27日(金)

発着地 滞在地	現地 時間	交通 機関	スケジュール
			ホテルにて朝食
ハイデラバード		専用バス	朝、ホテル出発
			ハイデラバード空港到着
ハイデラバード発	11:15	SQ519	空路、シンガポールへ 【所要時間：4時間45分】
シンガポール着	18:30		乗り継ぎ

食事：朝食／ホテル　昼食／機内　夕食／未定

起床時間：　時　分
朝　　食：　時　分
集合時刻：　時　分（場所：　　）

【メモ】

7日目　2024年12月28日(土)

発着地 滞在地	現地 時間	交通 機関	スケジュール
シンガポール発	01:20	SQ672	空路、中部へ 【所要時間：6時間10分】
中　部　着	08:30		中部国際空港着、通関後解散 ～お疲れ様でした～

食事：朝食／機内　昼食／ー　夕食／ー

【メモ】

お問合せNo. : 0934948187

ReceiptNo. : 7723 - 0000403
発行日 : 2025年02月03日

RECEIPT
領　収　書

浜松市議会　自由民主党浜松　御中

¥ 99,550—

金種 : 振込

THE ABOVE MENTIONED AMOUNT HAS BEEN DULY RECEIVED
上記のお振込金額正に領収致しました。

ご旅行代金として
令和６年度　静岡県インド訪問団・浜松市団
2024年12月22日～12月28日
別紙、領収書明細書のとおり

５名様
柳川樹一郎様　濵美誠様　松本康夫様
小野田康弘様　鈴木裕之様

HANKYU HANSHIN BUSINESS TRAVEL
株式会社 阪急阪神ビジネストラベル　ＭＩＣＥ営業部
〒103-0011　東京都 中央区 日本橋大伝馬町10-8 タキトミビル5階

200円 [redacted]

[redacted]

発行担当者 [redacted]

【領収印無きもの及び金額訂正したものは無効です】

2020年2月3日

領収書明細書【食事代金】

浜松市議会　自由民主党浜松　御中

株式会社 阪急阪神ビジネストラベル
103-0011 東京都中央区日本橋大伝馬町10-8 タキトオビル5階
TEL: 03-6745-7387 FAX: 03-6745-7386
代表取締役社長　福澤　太郎
発行責任者:MICE営業部 [redacted]
担当者:MICE営業部 [redacted]
旅行業務取扱管理者:[redacted]

責任者印	担当者印
[redacted]	[redacted]

・御川　泰一郎　様
・服部　誠　様
・松本　康光　様
・小野田　康弘　様
・鈴木　祐之　様

●食事代金

項目	日付	利用場所・業態	単価(円)	数量	小計(円)	備考
食事代	12/23 昼食	【昼食】SMG受託食事 和食	2,800	5	14,000	和食 <非課税>
					0	
食事代	12/24 ネットワーク	【夕食】ハイアットリージェンシー パーティー	5,000	5	25,000	パーティー <非課税>
					0	
食事代	12/25 昼食	【昼食】IBISホテル・デリー ブッフェ	5,500	5	27,500	ブッフェ <非課税>
					0	
食事代	12/26 夕食	【夕食】TRIDENT HOTEL イタリアン	4,800	5	24,000	イタリアン <非課税>
					0	
					0	
					0	
					0	
					0	
					0	
					0	
					0	
					0	
					0	
					0	
					0	
小計					90,500	
取扱手数料	旅行取扱手数料(飲食代金合計金額の10%)相当額				9,050	【課税・税込10%】
	領収金額 合計 (円)				99,550	

請 求 書

発行日：2025年01月10日
請求書NO：[redacted]

浜松市議会 自由民主党浜松 御中
御川 樹一郎 様 遠藤 誠 様 松本 康夫 様
小野田 康弘 様 鈴木 裕之 様

登録番号 ：T4120001126778
株式会社 阪急阪神ビジネストラベル

〒103-0011
東京都中央区
日本橋大伝馬町10-8タキトミビル5階

MICE営業部
担当：[redacted]
TEL:03-6745-7387
FAX:03-6745-7381

いつも格別のお引き立てを賜り誠にありがとうございます。
下記の通りご請求申し上げます。
尚、振込手数料はお客様にてご負担いただきますようお願い致します。

ご請求金額	¥99,550ー
お支払い期限日	2025年01月31日

振込先	
	三菱UFJ／新橋駅前
	普通預金 3578805
	(株)阪急阪神ビジネストラベル

お問合せ番号：0934948187
出発日：2024年12月22日（日）

責任者印	担当者印
	[redacted]

令和6年度 静岡県インド訪問団・浜松市団

請 求 明 細	利用日	単価（円）	数	小 計（円）
食事代（別紙明細参照）【非課税】 外		90,500	1	90,500
食事代（別紙明細参照）【課税・税込10%】		9,050	1	9,050

消費税	金額（税込）	内消費税額
10%対象	9,050	823
軽減税率8%対象 ※	0	0
課税対象外 外	90,500	0

合計金額	(A)	99,550
既入金額	(B)	0
今回請求額	(A-B)	99,550

2025年1月10日

請求明細書【食事代金】

浜松市議会　自由民主党浜松　御中

株式会社 阪急阪神ビジネストラベル
103-0011 東京都中央区日本橋大伝馬町10-8 タキトヨビル4階
TEL: 03-6745-7387 FAX: 03-6745-7386
代表取締役社長　福澤　太郎
発行責任者:MICE営業部 [redacted]
担当者:MICE営業部 [redacted]
旅行業務取扱管理者: [redacted]

責任者印	担当者印
	[redacted]

・柳川　純一郎　様
・[redacted]　様
・松本　康夫　様
・小野田　康弘　様
・鈴木　浩之　様

●食事代金

項目	日付	利用施設・内容	単価(円)	数量	小計(円)	備考
食事代	12/23 昼食	【昼食】SHG浜内食堂 和食	2,800	5	14,000	和食 <夜懇談>
					0	
食事代	12/24 ネットワーク	【夕食】ハイアットリージェンシー パーティー	5,000	5	25,000	パーティー <夜懇談>
					0	
食事代	12/25 昼食	【昼食】BIG ホテル・デリー ブッフェ	3,500	8	27,500	ブッフェ <夜懇談>
					0	
食事代	12/25 夕食	【夕食】TRIDENT HOTEL イタリアン	4,800	5	24,000	イタリアン <夜懇談>
					0	
					0	
					0	
					0	
					0	
					0	
					0	
					0	
					0	
					0	
					0	
					0	
小計					90,500	
取扱手数料	旅行取扱手数料(旅行代金合計金額の10%)相当額				9,050	【税・税込10%】
食事代　合計　(円)					99,550	

（様式13）

海外出張報告書

令和７年 １ 月２１日

浜松市議会議長　　鳥井　徳孝　様

会　派　名　浜松市議会 自由民主党浜松[redacted]

代表者氏名　会長　倉田　清一[redacted]

（署名又は記名押印をしてください。）

令和６年11月８日付届け出ました、所属議員の海外出張につきまして、下記のとおり報告します。

記

１　出張期間

令和 ６ 年１２月２２日(日) から 令和 ６ 年１２月２８日(土) まで

２　出 張 先

インド（アーメダバード市 ・ デリー市 ・ ハイデラバード市）

３　出張の理由

経済成長著しいインド共和国と、経済だけではなく、人材・文化・スポーツ・教育等あらゆる分野での交流により本市との協力関係の構築を図る。

４　出 張 者（氏名印）

柳川樹一郎[redacted]　　渥美　誠[redacted]　　松本　康夫[redacted]

小野田康弘[redacted]　　鈴木　裕之[redacted]

５　出張の顛末

別紙の通り

インド視察報告書

自由民主党浜松
柳川樹一郎

【目的】
本市が抱える人口減少の課題を解決するため、経済成長著しいインドと経済交流や人材交流を目的に、アーメダバード市、インド工科大学ハイデラバード校（IITH）との連携の取り組みを進める。
アーメダバード市、グジャラート州日印友好協会、IITH等を訪問する当局に同行し、今後インドとの交流が行政レベルから市民レベルに展開されることを踏まえ、文化・スポーツ・教育などあらゆる分野の交流等可能性を探る。

【視察日】２０２４年１２月２３日（月）

【訪問先】スズキ・モーター・グジャラート

【説明】
視察は１２月２２日から２８日までの一週間の予定で計画されました。中部国際空港セントレア１０時２０分のフライトでシンガポール空港に向かい、乗り換えの後、インド・アーメダバード空港に夜１０時過ぎに到着。
視察１日目は２３日７時にホテルを出発し、スズキ・モーター・グジャラート社に伺いました。（ホテルを出てから３時間で工場に到着）。
敷地面積300万㎡、従業員3,200名とインドでも最大級の工場であり、その規模に驚くとともに、インドでのさらなるシェア拡大を目指す[redacted]氏の思いに凄さを感じずにはいられませんでした。
工場面積は２６０万㎡、でAブロック・Bブロック・Cブロックに区分けしてあり、Cブロックでは日本にも出荷しているフロンクスを生産していました。インド工場では、現在３００万台の生産をしていますが、あと１００万台の増産を計画しているとのことで、その出荷先はアフリカ方面だそうです。
工場内は、ロボットが主役で、人の手を必要とする工程が少なく、生産工程が稼働していました。ここでは日本に逆輸出しているフロンクスの生産現場を視察。約５分間に１台の仕上がりだそうです。完成検査においては、人の感覚を必要とし、人の操作で行っていました。
工場内で工程を見学した後、１万台のストックヤードと貨車輸送の基地を見学しました。１車両に２７台を乗せるように特殊車両を製作し、２０％が貨車輸送で一日に2700台を港へ搬送、残りの80パーセントはトラック輸送とのことでした。
工場から港までは３００kmの距離がありますが、この地への工場誘致に際しては、

「近くで最良の場所」とのことで、浜松と豊橋三河港まで２５㎞程度、御前崎港まで４０㎞ほどを、「近いだの遠いだの」と言っている事がおかしいと思えるほどインドのスケールの大きさ、距離感の違いを感じました。

【所感】

[redacted]は、「工場は景観だよ」とよく言っていたそうです。また、「歩くときポケットに手を入れない」「携帯を使用して歩かない」「階段で、手すりを持たない」「工場内は、走らない」「斜め横断をしないで、左右の確認をする」といったマナー順守が約束になっているとのことです。

私の判断ですと、見た目が「良いか悪いか」で判断ができることを言っているのではないか思いました。工場内は整理整頓がされていて、床も事務所の床と変わりなく、工場とは思えないほどでした。インドにおいて日本の精神を前面に打ち出し工場運営がされていることに驚嘆したところです。

このグジャラート工場では、１万 5,000 人の従業員のうち、正規職員は 4,000 人、そして日本人 200 人で運営しており、税金を支払った後の収益から、社会貢献面で、病院や学校など支援をしているとのことでした。

インドの経済成長や国民生活の向上に貢献していることに、日本人として、浜松市民として感動を覚えました。

【訪問先】グジャラート州印日友好協会

【説明】

「インドとの市民レベルでの友好関係を構築するため、音楽・美術・伝統芸能などの文化的な交流の可能性を探る」として 1975 年に設立されたグジャラート州印日友好協会は、アーメダバード経営者協会と提携、会長に[redacted]氏が就任しています。[redacted]氏は、2017 年に日本の旭日小受章を受賞しており、グジャラート商工会議所会頭、アーメダバード経営者協会総裁等を歴任しています。

「Next Bharat Ventures IFSC Private Limited（ネクストバーラトベンチャーズ IFSC プライベートリミテッド）（スズキ株式会社のインド子会社）は、自動車を作ってインドを変えた、そしてスズキは１０億人を変えていくと思っている。インド人もインド政府もスズキを支援していく」さらに、「スズキがもたらしてくれたプログラムに感謝している。さらにこれ以上の貢献することにも期待している」と感謝の弁を述べられました。

また、「４０兆円を超える経済力、そして鉄道の延長（日本の技術の新幹線）さらに世界４０億人の為に、日本とインドとの関係はよくなって３００兆円の経済大国となるためには、日本の文化の考えが必要です。規則・規制と改革を政府がしっかりやっていかねばいけない」「スズキのお陰で、２００件の投資ファンドが出来ました。また、生活水準の向上のため大学も病院も出来支援してくれることがうれしい」とも語

り、「これから投資家が、２０年でどのようにして行くか、６６％の成長があり政府は中国より優れている」と豪語していました。

また、「４０年前にインドに進出し、インドのリスクを承知しながらここまでインドを変化させてくれたのは、[redacted]氏のお陰です。感謝しています」とも語り、私たちも誇らしげに話を聞くことが出来ました。

【視察日】　２０２４年１２月２４日（火）

【訪問先】　ジャラート州政府・アーメダバード市政府

【目　的】　アーメダバード市との友好関係構築

【説　明】

この日は訪問前に、アーメダバード市が区画整理事業で開発したサバマチ川両岸を繋ぐ巨大アテルブリッジに案内していただきました。このブリッジは両岸の干拓事業の象徴として建設されたものだそうです。赤いじゅうたんが敷かれ、[redacted]さんと市長さんのもてなしで花束まで用意されていました。[redacted]さんに感謝です。

この後、グジャラート州政府アーメダバード市庁舎において、プラティバベン・ラケシュクマール・ジャイン・アーメダバード市長への表敬訪問を行いました。

アーメダバード市長からそれぞれに、記念品として橋のミニチュアが贈呈され、中野市長・鳥井議長・[redacted]からもアーメダバード市長に記念品が贈られました。



続いて放映されたアーメダバード市の紹介ビデオでは、毎年１月 14 日（祭日）に行われる凧揚げイベントの説明や浜松との縁があることが紹介されました。

中野市長は、この凧揚げイベントに浜松市も参加させていただきたいこと、これから３０年・４０年・５０年もこの関係を繋げていくことなどを約束しました。

また鳥井議長からは、浜松市とアーメダバード市が産業の面で共通していることから、やらまいか精神を共有し、両市が関係をより深くしていくことが

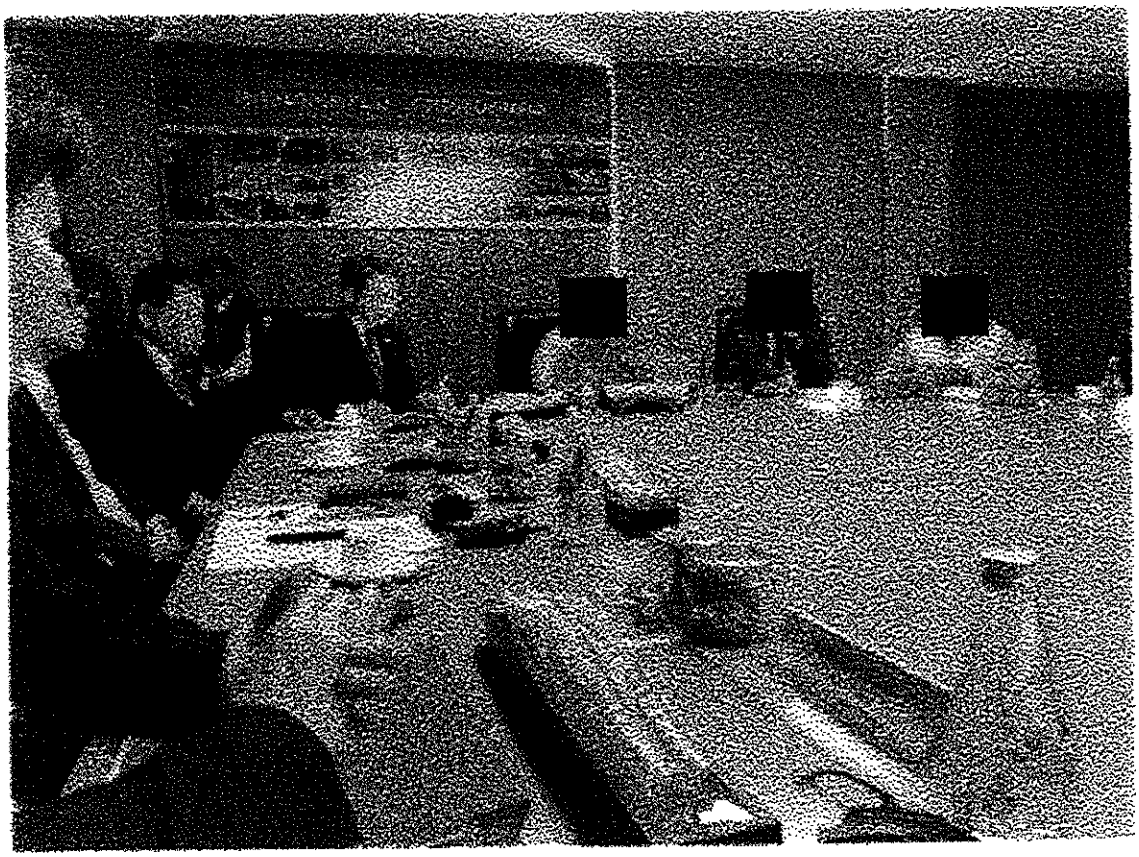
大切であることなど話されました。

アーメダバード市長からは、「尊敬するシン首相の思いのもと発展しています。先日行われたＧ２０の折には、モディ首相も浜松スズキからいただいた提案・提言や支援に感謝していることが報告されました。モディ首相が言うスタートアップの事業に力を入れているとのことです。

これからの未来に向けて、密に関係を保ちながら、いろいろな面で関係を作り上げていきたい。人と人との関係がさらに深く、未来を築く中学生や高校生の若い力を繋げ取り入れていきたい。

グジャラート州と静岡県とのパートナーＰＡＹで３兆円の経済工場が得られる。スズキ（株）の貢献度は大変大きくエネルギーを感じる。日本との協定が強いことなどから、経済的・人的交流豊かな文化交流の関係が進化していくこと目標達成に大きな機会となりました。世界は一つ、マハトマガンジーが言うアーメダバード遺産は街教育・医療・産業すべてがモディ首相の言うように、浜松市からの提言に大きく恩恵を受けていると思っている」と歓迎の意が表されました。

鈴木静岡県知事からは、「静岡県は温泉も海の幸もあり県西部には浜名湖があり凧あげ祭りもあり素晴らしいところです。グジャラートと静岡との関係を密にしていくこと交流を深めていくと願っている」ことを伝えました。



【視察日】　２０２４年１２月２５日（水）

【訪問先】　IBIS Newdelhi Aerocity（全日本空輸（株）デリー事務所）

【目　的】　インドから日本に来ているワーカー層の現状及びインドの送り出し機関の現状等の把握。本市へインド人材を呼び込むための可能性調査。

この日は全日本空輸（株）デリー事務所を訪問。[redacted]ANAインド代表兼デリー支店長の講演を伺いました。

インドはＧＤＰ世界第３位。ベトナムの人材についての話はよく聞くが、インド人は、盗人や置き引きなどせず生真面目で勤勉、そしてアニメ好きの若者や親日家が多く、日本に行って旅館などでまじめに働いている人がたくさんいるそうです。福井県では、看護師として技能実習生の受け入れや日本旅館業協会などがあると言う事です。

ＮＳＤＣ（インド国家技能開発公社）では、日本での受け入れに対し、日本企業や職業専門学校などで日本語などの勉強をしながら職業技術を身に着けることができ、インドの若者が日本で活躍できる環境が整ってます。このシステムが軌道に乗れば、労働力不足の解消など、日本の企業のためにも優位になります。ベトナムやフィリピンを始めとする東南アジアでの日本への人材派遣ブローカーとは違う高度なシステムにより、質の高い外国人材を得ることができる素晴らしいものと思いました。

【視察日】　２０２４年１２月２６日（木）

【訪問先】　インド工科大学ハイデラバード校

【目　的】　インド工科大学ハイデラバード校とNext Bharat Venturesと覚書書を締結

この後、空港に向かいハイデラバードに向かいます。（ちなみにこの行程は、中部国際空港から札幌に行ってその日に沖縄に行くようなものとのこと。）

ハイデラバードにあるインド工科大学ハイデラバード校に伺い、大学と連携強化とスズキイノベーションセンターを視察することになっています。

朝７時３０分ホテル出発し、約２時間かけインド工科大学ハイデラバード校に大学に向かいました。大学の敷地は大変広く、その中に校舎が建っています、学科や専門分野ごとに建物があり、始めての人は迷うほどです。

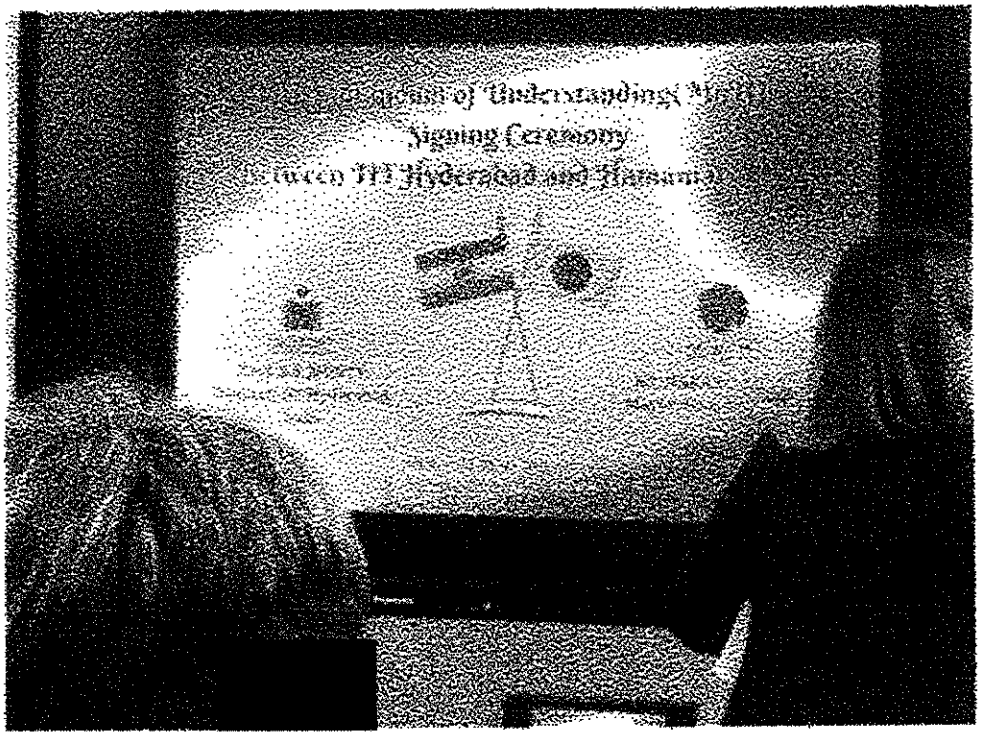
[redacted]氏によると、インド工科大学は、国内に２３校あり、計算機科学で工学科では、「ジャパンデスクとして日本との窓口になっている。」と[redacted]先生は言っていました。また、ハイデラバード校は、ランキングで以前は８番目であったが、今はイノベーション分野では他の大学より勝っていて３位となっている。

学生数は、１８学科5,000人。さらに人工知能AIにおいてはAIの権威ある先生が揃っていると言っていました。日本からも慶応大の[redacted]氏や京大からも教授が来ている。世界のトピックスに対応すべく分野も行っているとのことでした。

イノベーションにおいては、IITHで就職窓口を多く作り、学生に夢・アイデアを実現すべき開発資金の出資もするようにした。会社も設立出来るようにアドバイスもしているとのことです。

この様にチャレンジ精神の旺盛な学生にはどんどんチャレンジしていただき、失敗してもいつでも大学に戻れるようにしているとのことです。

IITHの卒業生は、スズキに１６名、バッテリーのデンソウ、メルカリ、ヤフージャパンなど日本の企業に３００名ほど就職している。アメリカより日本は行ける国であると、学生が日本への就職を目指している。



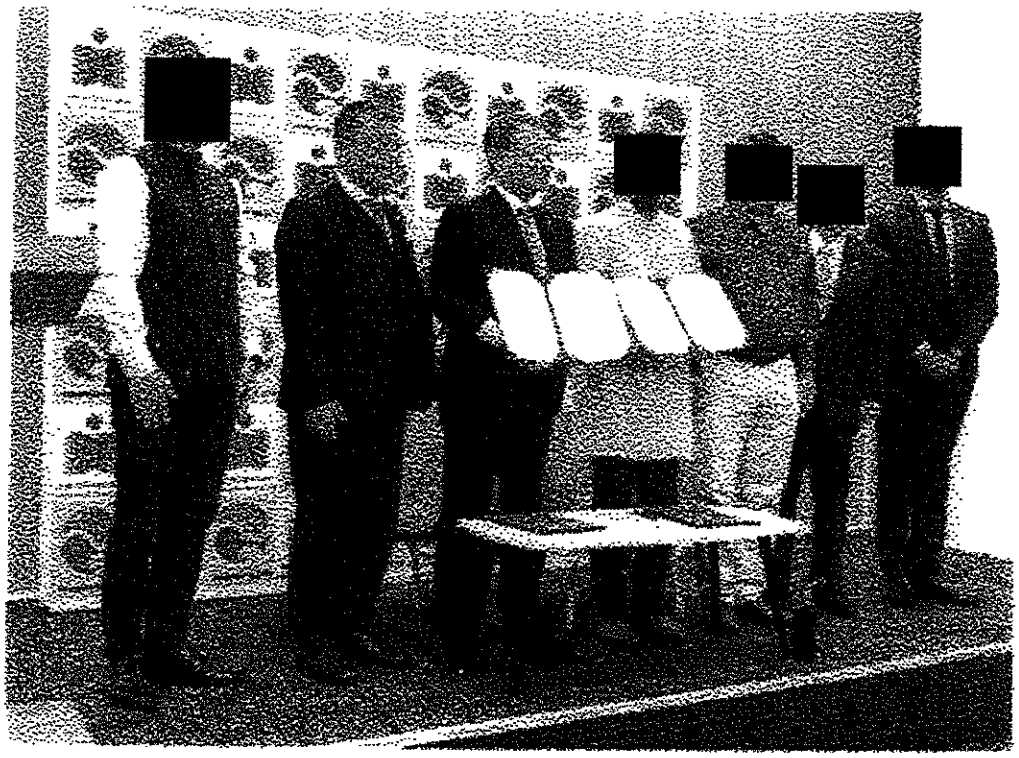
ここで、学長の話が始まりました。「浜松の市長さんが、ハイデラバードまで来てくれることは初めての事です。これも、[redacted]先生のお陰です。IITHが１９５１年から始まって、このようなことは初めてです。また、ジャイカのシステムの中で第２段階となり日本の企業との連携ができるようになった。大変うれしいことです。

さらに、スズキが浜松市とつなげるコラボレーションが大変大きな関係になります。２０４７年には、先進国の仲間入りをしますと言っていました。

また、IITHの学生が世界で働く・日本（浜松）との交流はどんなメリットか大事なことです。アメリカに行きたいか、日本は文化面で学べることが日本を愛することになる。日本との懸け橋となれるか、生活面でも日本の文化を学べることが大きいと言

っていました。（日本で生活しながら企業や大学そして地域の生活コミュニティの中で学ぶことの大切さが大きい。）

浜松市長も、グローバルな社会に対応できる学生の育成を目指していくことを約束としていました。



同行した記者からもコメントがあり、中日新聞の[redacted]記者は、IITH の学生が浜松に来ていただき、静大の学生とも交流していただければ言っていました。また、[redacted]先生に、来年は浜松に来て浜松の高校生と世代を繋げる意味で話をして頂ければと言っていました。

静岡新聞の[redacted]記者は、学長さんの浜松市への思いに感動した。ハイデラバード・スズキイノベーションセンター・スズキ・浜松市の連携のもと、４０人を超える卒業生が就職している。また他企業へも人材を出してきたことに感謝です。もう一つは、浜松と浜松の企業との共同研究への期待ですと言っていました。

最後に、スズキとハイデラバードとの関係は、マルチスズキの事をインド人は一番よく知っていることです。研究や交流の面そしてネクスト・ハイデラバードと言っており、農業分野での開発です。スズキでも牛糞を利用したバイオマスの発電と牛糞の利活用と言っていました。農業に際しては、２月に教授が浜松に来る際、浜松市の農業において先進の農業の農福連携の京丸園の水気耕栽培を見学してただこうと、産業部長と話をしています。

中野市長からは、人材交流の面でネキスト Bharat に市の職員を派遣していくことを発表しました。

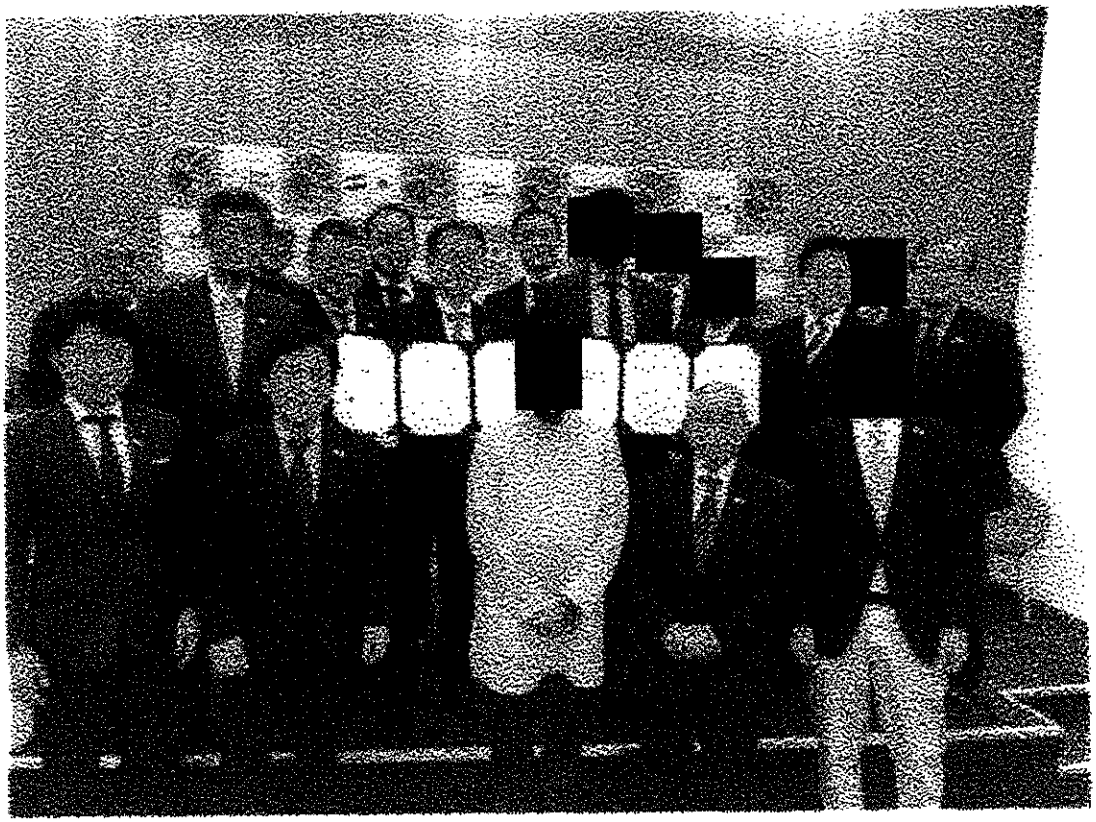
大学での説明の後、スズキイノベーションセンターを視察しました。大学の一角にイノベーションセンターがあり、常に大学と学生とスズキが連携を取り浜松へも情報提供をしていくことです。これからのインドとの懸け橋を執り行われるものと信じています。

大学を後に、最後の視察クリケット場を視察しました。クリケットは、インドの国技となっているものです。クリケット場は大きなものは１０万人が入れるものから３万人ほどのものまであると言う事です。

【所感】

インドは途上国とはいえ、デジタル化が進んでおり１４億人の人口の内１３億人に個人登録が出来ており、女性の９０％が口座を持っているとのこと。その一人一人が融資も投資もできるようになっている。社会保障など個人口座に振り込まれるようになっている。キャッシュレス化も進んでおり、使用できるところは限られているものの、露天商のようなところでもカード決済で、現金は使わない社会が出来ていると言う事です。

最先端を行くデジタル化や工場形態も先進技術が日本の技術のもと、目覚ましい発展をしている様を視察させて頂き驚嘆しました。４０年以前にこの地に入りここで自動車生産をする約束をした[redacted]氏の偉業は計り知れないものです。インド・アーメダバード市とスズキ・スズキイノベーションセンター・静岡県・浜松市との協定の取り交わしは、未来の浜松市の行く末が保たれる大きな役のようにとらえることが出来ました。大変貴重な場面に立ち会うことができ、今後ますます本市とインドの交流を深め、ともに発展していくことを期待します。



＜インド視察報告書＞

令和７年１月２０日　報告者　灘美　誠

◆スズキ・モーター・グジャラート（S・M・G）～１２月２３日（月）

【概要】

SMGは、インド西端で隣国パキスタンに接するグジャラート州にあり、アーメーダバード市近郊１００ｋｍに立地する。現在、マルチ・スズキ・インディア（通称マルチ・スズキ）社の１００％子会社で四輪生産を行う。２０１４年の設立後、２０２３年１２月に累計生産３００万台を達成、２０２４年１０月には、フロンクスを日本市場で販売開始した。現在稼働３生産ラインを４生産ラインへ拡張し、２０２６年に、年間生産能力を現在の７５万台から１００万台への稼働開始を目指す。更に、今後、現在の生産拠点とは別の場所に、年間生産能力１００万台規模の新工場を建設、グジャラート州と、生産能力が合わせて２００万台体制となる基本合意をした。

SMGは、従業員総数が約１５０００人（正規４０００人）で、１００００人がワーカー、３０００人が警備、２０００人が管理部門となっているが、工場内には常時、５０００人程度が作業にあたる。期間工員は１０万円/月程。日本人従業員は２００人程度で、近くに塀に囲まれ、銃所持のガードマンが警備にあたる社員寮がある。帯同者はほとんどなく、子供の帯同は全く無しで、奥さん帯同の場合でも、奥さんはアーメーダバードに住む。また、現地勤務年数は、ラインが２～３年、その他が５年を目安とする。こうした地域雇用を創出する事業を行っている中、インド２％ルールがあり、企業規模の大小を問わず、税引き後の最終利益の２％を社会貢献活動への還元が義務付けられているため、マルチ・スズキが病院や学校を寄付している。

工場内の視察では、生産ラインにおけるプレス、ロボット溶接、（塗装）、組立、完成検査各工程の説明を伺う。また、工場内では、安全ルール６則、ポケテハナシ（ポ・　ポケットに手を入れない、ケ・携帯電話を見ながら歩かない、テ・手すりを持って階段を昇る、ハ・走らない、ナ・斜め横断の禁止、シ・指差呼称の徹底）を確実に行い、この安全管理を工程管理、品質管理へ繋げる。

プレス工程では、５２００トンプレス機５基が５秒に１枚加工を行う。溶接工程では、１００％自動化で、サイド部品やルーフへのスポット溶接４０００ヶ所を５０秒/台で行う。組立工程では、シャーシ等を組み立てる。完成検査では、蛍光灯等による６０項目等のチェックを行うが、フォークリフトによる工場間の製品移動は行わない。最終検査では、機能検査、ドラム検査、ABS検査に加え、屋外ショートロード検査、水漏れ検査を行う。こうした完成車はストックヤードへ移動、カーボンニュートラルを考慮した鉄道による出荷となる。視察時には、約１万台がヤードで出荷を待つ。鉄道エリアには４レーンの軌道があり、３レーンで１０００台/日の積込み能力がある。具体的には、２７貨物（２７０台）を３～４編成で８００～１０００台/日出荷する。出荷は国内が７割、残りの３割が国外へ向け、鉄道エリアから港へ運搬する。



スズキ・モーター・グジャラート（S・M・G）工場　外観

【所感】

アーメーダバード市は人口６３５万人、グジャラート州最大の都市であり、州都ガンディナガルとの双子都市と言われ、インド最大の織物の中心地の１つとなっている。しかし、スズキが企業進出した１９８０年代前半のインドは、グジャラート州に限らず、日本人にとっては、インド国土全体が、道路等の基盤整備は基より、生活環境全般にわたり、大変厳しい状況下にあったと関係者が振り返る。こうした中、スズキは、グジャラート州アーメーダバードを重点生産拠点の一つとする経営戦略に社運を賭けた。工場建設予定地周辺は、原野、荒野とも言える未開の地であり、満足な道すらなく、当時の関係者はまさに開拓者そのものであり、その不屈不屈の日本人スピリッツが、４０年近く前のこの地アーメーダバードにあった。以来、地域との共存、共栄の歴史を重ね、現在、累計３８０万台を生産、約１５０００人（一部日本人含め）地元雇用を創出し、更に、地域医療や学校教育等の企業の社会的責任（CSR）を果たす。

SMGは、アーメーダバード市街から１００ｋｍ程度の近郊にあるが、移動バスの窓外に広がる景色に、道路周辺の散乱したごみ、痩せた野良牛・野良犬、裸足の子ども、働いていないと思われる大人達等が映る。しかし、何故か、我々にとって、この異様とも思える生活環境に不自然さはなく、ゆったり感さえ感じる。更に、その瞳は明るく微笑む。まじめな国柄が表れていると感じる。工場入門ゲートを通過すると、そこは、全く日本の工場内と思うほど、整理整頓、安全第一を徹底する。工場・工場間通路・ストックヤード等が広がる広大な敷地であるが、警備等も含めた管理体制が整っている。こうしたインドの国柄、スズキの社員教育の実績と、本市の各分野が切迫している人材不足課題等とを相互共有し、お互いにウインウインの関

係となる、パートナーシップ構築に向けたこのタイミング、チャンスを逃してはいけないと強く感じる。

◆マンダル工業団地～１２月２３日（月）

【概要】

マンダル工業団地は、日本の経済産業省とJETROがグジャラート州政府と共同で企業誘致を進める日本企業向け専用の工業団地で、現在、９社が入居し、静岡県内企業では、村上開明堂、ASTI, ROKI、MAアルミニウムが入居する。豊田通商インディア社（TTIPL）は、こうした工業団地テクノパークにおいて、レンタル工場や日本式ものづくり学校事業を展開する。豊田通商インディア社は、インド国内で、様々な事業を展開するが、ほぼ全ての事業をテクノパークで行い、工場操業支援事業及び物流拠点を運営する。本社はバンガロール、インド国内に複数拠点を持つ。１９９９年に駐在事務所を開設以来、２５年が経過。現在、グループ会社を含む２４社、社員数１万人弱、駐在員６０名程度で運営にあたる。

豊田通商インディア社は、事業に大きな３本柱、一つ目は、モビリティの発展、二つ目は、交通渋滞、交通事故、大気汚染等の社会的な課題解決、三つ目は、歴史的に見ても東西の結節点と言われるインドを起点とする中東、アフリカへの架け橋を掲げる。一方、現在取り組んでいる事業に、マルチスズキとの合弁会社で、自動車廃車のリサイクル事業を１拠点で行い、更に、インド全州への拠点展開中であるが、法律的な課題もある。こうしたリサイクルを通して、資源の有効活用、サーキュラエコノミー、そして、カーボンニュートラルへの貢献を進める。また、セコムとの合弁で総合病院をバンガロールで運営している。最初は、駐在員の生活基盤充実に向けた事業として始めたが、患者の９９％が現地のインド人が利用する病院であり、社会基盤の地元貢献でもあり、今後は、こうした事業モデルを広める。

豊田通商インディア社は、テクノパーク開発を１９９８年以降、３地域３社４拠点で事業展開、４拠点の一つを、マンダル日系専用工業団地内に３つの敷地を保有する、TTIPLの100%子会社豊田バーラト（TBIS）が運営する。TBISの主な事業は、モビリティ事業への貢献、当社日本式ものづくり学校を通した地域人材育成への貢献、部品メーカーの支援によるものづくりサプライチェーンへの貢献である。TBISは、２０２３年、既存の３社を統合、新たにロジステックを加えた事業を開始、マンダル工業団地は、アーメーダバード空港から約２時間、ＳＭＧから約３０分、また、ムンドラ港を代表する３港までトラックで２４時間以内（アフリカ向け輸出に最適）など立地の良さがある事から、過去の実績では、レンタル工場を活用し、最短６ヶ月で操業開始したケースがある。

豊田バーラト（TBIS）は、インド進出における大きく３つの課題への整理、対応、そして解決へと進出企業を支援する。

１つ目は【用地取得のハードルが極めて高い】、これは慢性的な工業用地の不足、制度・手続きが複雑で不透明、州政府の理解、協力の必須にある。解決策として、土地収用済、工業用地に整備済（農地転用）による土地取得、政府許認可の取得、電気・水道インフラ整備、道路整備、敷地造成等のいわゆる土地収用・造成・インフラ整備済を提供する。企業のメリットは、通常３年のリードタイムを最大１年半、最短６ヶ月と進出リードタイムの短縮、通常５０％程度を８０～９０％への高い建蔽率確保及びインフラ、各種共通サービス整備済による初期投資削減、現地調達部材、製品拡販への支援、日本式ものづくり学校設置、人材育成支・援を通したランニングコスト削減となる。こうした、土地建屋の取得や電力・水の確保、許認可

取得支援、工場周辺サービス等を整備し、コンセントをつなぐだけで、簡単に操業できる環境やサービスを提供するプラグ&プレイ型貸工場をコンセプトに掲げる。工場タイプはレンタル型（賃貸マンションタイプ）とオーダーメイド型（注文住宅タイプ）がある。レンタル型は、２０００㎡～３０００㎡の２棟あるが、現在、満床のため、３棟目の建設を検討中。オーダーメイド型は、フェーズ１・２・３があり、フェーズ１は満床であるが、約１０万㎡の空き地がある。タイプ別貸工場を紹介しているが、今後は、レンタル型でスモール&クイックスタートし、将来的にオーダーメイド型で安定操業体制への移行をモデルケースと捉える。

２つ目は、【優秀な人材の確保が困難】には、ホワイトワーカー（間接部門）では労働環境の重視、ブルーワーカー（製造部門）では工業用人材の確保が困難、新卒の採用率が低いなどの課題があるが、求職者への重視ポイントを、通勤手段のサポート、食堂の充実、福利厚生・基本的な設備など働く環境とする。解決策として、食堂では、団地内の従業員の５０％以上の食事を提供（デリバリーサービス）、医務室では、看護師の交代勤務による２４時間対応、２４時間救急車サービス、AED,酸素ボンベ整備、また、通勤バスは、GPSによる定時運行管理、ドライブレコーダー完備、ドライバー向け危険予知トレーニング実施する。更に、人材育成面では、日本式ものづくり学校を団地敷地内に併設、１９５９年設立の技術教育分野で強みを持つ教育機関（NTTF）と連携し、導入教育（初期研修）３ヶ月＋入居企業での（OJT）３３ヶ月の３年間のプログラムを提供する。当校は、貧困層への教育機会の提供、日本式ものづくりの考え方を指導と将来の現場リーダー育成、地域出身者の雇用、地域社会の発展への貢献を目指す。また、学生に求める人物像を、規律とチームワークを具えた信頼できる人材、知識に加え、現場経験を積んだ人材、日本企業への深い理解と掲げる。

３つ目は、【労務問題や法制面への対応】では、グジャラート州は労務問題が比較的少ないが、ストライキやデモはゼロではなく、当工業団地周辺地域でも発生し、過去には暴動も起きていた。解決策として、テーマパーク入居企業を含めた、日系工業団地の日系企業代表者９社が、JETROの音頭で、定期的に代表者会議を開き、マネジメントサポートによる市場情報、各種法令改正等の情報交換・共有、対応協議の場を運営し、重大問題発生前の未然防止に努める。



マンダル工業団地入口

5

【所感】

豊田通商インディア社が、インド国内におけるテクノパーク開発事業を展開し、インド進出企業を進出検討から会社設立、その後の入居、そして生産開始までを併走支援する。現在、マンダル工業団地に入居する９社が、当面の課題への対策を実践してはいるが、周辺地域での労務問題発生事例もあり、代表者会議での協議を通した未然防止体制に取り組む。更に、人材育成の観点から、日本式ものづくりの考え方を指導し、地域社会の発展にも貢献する。経営面からは、コスト低減、現地調達化に向けたプライチェーンの充実強化が重要となり、現地の法制度や商慣習に合わせた業務標準規程の策定も求められると考える。

日印政府共同PTの基、経産省が認可した、日本式ものづくり人材育成学校のトレーニング風景と貸工場の内部を見学した。ものづくり学校での学生採用プロセスは、当初１００名程度を最終２０～３０名程度までに絞り込み、人材を選抜する。これまで、学生が、６１名卒業、そのうち、４５名が日系企業に勤務、日本企業と現地雇用をつなげる社会貢献に寄与する。地道ではあるが、日本にとっても、インドにとっても大切な取組である。貸工場の中は、ガランとしていたが、レンタル型として操業を向かえるが、将来的にはオーダーメイド型安定操業への移行モデルケースと見据える。

豊田パーラト（TBIS）が取り組むマンダル工業団地テクノパーク事業は、多くの課題の解消と成果を挙げている。その中でも、インド政府の理解、協力が必須であり、欠かせないと考える。インド国内における、今までに、日本が、日本企業が行った実績を基に、日印協調体制の一層の充実がインド進出の大きな鍵を握る。

◆グジャラート国際金融技術都市（GIFT　CITY）～１２月２３日（月）

【概要】

GIFT　CITY内クラブで、※ネクストバーラトベンチャーズIFSCプライベートリミテッド（以下、ネクストバーラト）が主催するNext Billion FORUM(ネクスト　ビリオン　フォーラム)が行われた。パネルディスカッションでは、インド独立１００周年を迎える２０４７年を見据え、政策、金融エコシステム、社会的取組等を通した、農村地域のコミュニティやインフォーマル経済に内包される労働者のエンパワメントを議論する。

GIFT（GUJARAT INTERNATIONAL FINANCE TEC）CITYは、インド初の最も先進的なスマートシティで、モディ首相の構想による国際金融サービスセンター（IFSC）が経済成長を後押しする新しい拠点となる。全体敷地面積３３００エーカーに、国内関税地域６２５エーカーと特別経済区（SEZ/IFSC）がある。アクセスは、アーメーダバード国際空港から所要時間２０分、新幹線ターミナルから所要時間１５分、また、メトロ、高速道路にもつながる。また、経済基盤強化プロジェクトが、地域冷却の革新性、最先端のAWCS（自動廃棄物収集システム）、ゼロ排出水管理、信頼性の高い電力インフラを整備する。オフィス設立を目指す企業へ、国内外のビジネス拠点となる優れた環境を提供する。

※ネクストバーラトは、スズキ株式会社が２０２４年に設立したインドにおける１００％出資の子会社で、合わせて、ネクストバーラトが運営するネクストバーラトベンチャーファンド－１を設立する。本社をバンガロールに、GIFT　CITYに新たな拠点を、ハイデラバードにその他の活動拠点を設置する。インドにおける社会課題の解消やファンドを通した社会起業家への支援、投資を行う。更に、モビリティ分野を超えた社会貢献を目指す。

本フォーラムは、農村地域やインフォーマル経済に属する「次の１０億人（ネクストビリオン）」に焦点を当て、その可能性や課題の議論を深めと共に、２０４７年までの大きな成長ビジョン「バーラト２０４７」を実現する戦略的なロードマップを考察する。

パネリストは、インドが２０４７年までに先進国となるには、日本の生産管理の考え方等を含めた日本の協力が不可欠で、税制の整備、インフラの整備、技術・人材育成等を整備し、輸出国となる必要がある。女性の組織化・ミクロ企業への取組が必要であり、デジタル決済へのスピーディー感も高く、９０％の女性が口座を持つ。現在、インド全体では８０％の人がデジタル決済を行う。こうした事を実現する上で、必要なのは資本である。多くの貧困を救うためには、大企業ではなく、ミクロ企業、零細企業や、女性たちへの投資を振り分ける必要がある。４０年前、スズキが大きなリスクを冒しても、遅れていたインドへ投資をした事、新しい価値観をもたらしてくれた事に、スズキをインドの家族と譬え、感謝を表す。ネクストバーラトのインパクト起業家への支援が、羊から得た羊毛を住宅用断熱材に変え、収入増加に繋がった実績例を評価する。

ネクストバーラトは、今まで、総人口１４億人のうち、４億人の方々と関わってきたが、残りの１０億人とは関わっていない。これからは、「次の１０億人」と呼ばれるNextBillionと関わり、インドの経済成長の発展への貢献を掲げる。そこで、税金を納めており、オフィスで働いている人をindia１、トゥクトゥクのドライバー、ストリートで食べ物を販売しているようなインフォーマルセクターの人をindia２、農村部に住んで農業に関わる人を

india３、と区別し、このindia２＋india３にフォーカスし、この人々の収入を上げるビジネスをする起業家を支援する。「次の１０億人」の価値を創出するためには、インド各地で問題を解決するためにビジネスを展開するインパクト起業家を支援し、その価値を最大化する。具体的な起業家の実績例を、一つ目は、コットン農家の新たな収入創出、二つ目は、羊毛を建築用断熱材へ商品化した新たな羊毛価値創出に挙げる。こうした、インド国内にいるインパクト起業家１００人以上にインタビューを行い、現在、享受出来る支援に何が欠けているか調査した。その結果、大きく３つのギャップが判明する。１つ目は、従来の投資機関は、急成長できるスタートアップ起業家を求めるため、このような技術体系のインパクト起業家に投資できる機関が不足する。２つ目は、スタートアップの起業家は助け合いながらビジネスを成長させる好循環なコミュニティが出来ている。一方、インパクト起業家は、インド中、津々浦々に散らばり、１つのコミュニティがなく、それぞれが孤立している。３つ目は、インパクト起業家は無名のため、ビジネスを成長させるための鍵となる外部のネットワークが乏しく、特に国外のネットワークのつながりがほぼない。こうしたギャップ（問題）を解決するため、インパクト起業家が、より早く、着実にビジネスを成長させ、次の１０億人に還元することが出来るよう、支援活動を行う。１つは、４ヶ月間のインパクト起業家支援プログラムを通して、インパクトと起業家のコミュニティの構築、投資機会を促進。次に、ネクストバーラトのシンクタンクとして、インパクト起業家が必要とする情報、ネットワークを提供。最後に、日本企業へインドビジネス機会の理解及び新市場の共同創造の場の提供を目指す。



グジャラート国際金融技術都市（GIFT　CITY）全景

8



Next Billion FORUM(ネクスト ビリオン フォーラム)会場

【所感】

ネクストバーラトは、世界金融をリードするGIFT CITY内に拠点を持ち、「次の１０億人」と呼ばれるNextBillionと関わる。インドは、この農村地域やインフォーマル経済に属するNextBillionに焦点を当て、２０４７年までの大きな成長ビジョン「バーラト（インド）２０４７」を実現する戦略的ロードマップを始動、モディ首相の構想による国際金融サービスセンター（IFSC）が経済成長を後押する。まさに、GIFT CITYを、インドの金融・技術の未来を変革する新拠点と位置付ける。「次の１０億人」が「今の１０億人」となるのに、どんな関わりをするのか、どれだけの時間をかけるのか。２０４７年以前に、「バーラト（インド）２０４７」が実現するのではないかと予感する。マルチスズキの４０年を超える経験、実績を尊重し、更に、情報収集共有を通じた活動を、インドとの相互人材育成、交流を創出する機会と捉える。

◆アーメダバード市長表敬～１２月２４日（火）

【概要】

グジャラート州と友好協定を締結する静岡県訪問団に同行し、インド有数の大都市で、成長著しいインド経済をけん引するアーメダバード市と本市の連携、交流の可能性を探るため、アーメダバード市長を表敬訪問する。アーメダバード市は、モノづくりの街・日本の経済けん引の街、本市とも、工業発展面での親近感があり、経済、文化、スポーツ様々な分野での友好関係を構築すべき大切な都市である。２０２５年９月、本市開催のインドフェスティバルは、新たな交流への期待を深める。中野市長は、交流促進に向けた取組を記した文書を、アーメダバード市長へ直接渡し、両市の一層の発展、多分野での交流への考えを伝える。具体的な内容は、カイト（凧）を介した交流、インドフェスティバル in Hamamatsu へのインドフェスティバルブース設置・招待、人材獲得・人材交流の総合支援、スマートシティー、カーボンニュウトラルに取り組むスタートアップ等の企業間交流に加え、文化・スポーツ分野の交流、中高生の交流等である。



アーメダバード市長表敬訪問

【所感】

今回、こうしてアーメダバード市長への表敬訪問が実現したのは、[redacted]氏が２０２４年２月に外務大臣から日本国名誉領事に任命され、同年１０月４日にアーメダバード市にインド初の名誉領事館が開設されたが、この[redacted]氏の功績によるものである。改めて、感謝致します。アーメダバード市長は、現在、教育、医療、観光分野等を前向きに進めているが、新たなイノベーションや意見交換、中学生、高校生等若い内からの交

流等を、本市との将来関係の始まりと期待をする。更に、「世界は一つ」と話す市長のグローバル感に、アーメダバード市の世界観、意気込みが見える。今後、グジャラート州との連携、アーメダバード市とのMOU（基本合意書）締結に向けては、アーメダバード経営者協会（AMA）パテル氏との情報共有、連携、更には仲介が重要と考える。

◆グジャラート州政府訪問～１２月２４日（火）

【概要】

グジャラート州は、インド北西に位置し、西は隣国パキスタン、南はアラブ海、東・北は他州と接する。州面積は、全国土の6.0%に相当する19.6万㎢、州人口は、全人口の7.7%に相当する約6500万人。綿花生産が盛んで、海に接する地の利を活かした東南アジア、中東への貿易を行うが、近年は、化学産業や製造業等を集積する。グジャラート州には、日本企業４０社進出、ジェトロがイベント等を開催し、日本企業進出のサポートをする。

静岡県がグジャラート州とMOU（基本合意書）締結を行う。静岡県は、インド国内での工業化が最も進展するグジャラート州は、豊かな文化と先進的な取組が背景にあり、注目すべき地域と認識する。更に、静岡県議会は、「静岡県と海外の地方公共団体との友好交流に関する条例」に基づき、インド共和国グジャラート州との友好協定の締結を満場一致で賛成議決した。知事は、このパートナーシップ締結が、経済、教育、文化、観光等様々な分野で、グジャラート州と新たな歴史・未来を作り上げると意欲を語る。

中野市長は、本調印式の前に、アーメダバード市長への表敬訪問、今後の交流、協力について、有意義な対話を紹介したことを触れ、本市でインド国籍の市内移住者が年々増加している状況、インドからの留学生の増加、インド国籍の方々の雇用の増加、また、その一方で、本市からインド進出を考える企業も現れ、こうした、人材交流、経済交流が進んでいる中、官民ともにインドとの連携を一層高める機運が高まっていることにも触れる。更に、グジャラート州、アーメダバード市、静岡県、浜松市が連携、友好関係構築への期待を伝える。



静岡県・グジャラート州　MOU（基本合意書）締結

【所感】

グジャラート州とアーメダバード市は、主従関係にあり、今回、静岡県はグジャラート州と友好協定を締結、本市はアーメダバード市と連携可能性、今後の友好協定締結を模索する。今後、インドにおける静岡県、浜松市それぞれの友好関係は、どのような役割を担うのか、また、グジャラート州とアーメダバード市は、州と市でどのような連携をするのかを見定める必要がある。

◆アーメダバード経営者協会（グジャラート州印日友好協会）訪問～１２月２４日（火）

【概要】

グジャラート州印日友好協会は、学術、ビジネス、文化の分野における日印関係の理解促進を目的に、1975年に設立。その後、2000年頃、アーメダバード経営協会（AMA）と連携し、2015年には、AMA内に日本情報研究センター（通称「AMA日本センター」）を設立。「AMA日本センター」は、日本語、芸術、文学、歴史、文化、伝統、ビジネス、経済、経営、及び日本に関連する多様な側面の研究・学習を奨励し、促進する。会長は、在グジャラート州日本国名誉領事に就任した[redacted]氏、グジャラート州印日友好協会会長も務める。

協会において、静岡商工会議所・浜松商工会議所・スズキ等で構成する経済団が、[redacted]氏他と面談を行う。

鈴木俊宏スズキ株式会社代表取締役社長は、面談の機会に尽力されたAMAの皆様への謝意と、NGOであるAMAが、アーメダバードの未来を担う若い経験層や地域の方々に、研修の機会や、学術、産業、文化、多岐にわたる交流の場を提供している事への敬意を伝える。スズキ・モーター・グジャラート（SMG）が2017年に操業を開始したが、スタートに向けては、日本式、スズキ式の働き方を研修に取り入れ、多くの日本人指導員を派遣する。鈴木氏は、今回、AMAが日本式、スズキ式の考え方を検討すると聞くが、改めて、スズキの考え方、働き方を、インドの皆様に限らず、社員にもしっかり検証する必要があり、このAMAの取組を好機と捉え、今後、セミナーの開催等への協力を約束し、賛同する旨を表明する。

[redacted]静岡商工会議所会頭は、冒頭、静岡市を触れ、人口は約６７万人、製品出荷額は２兆２０００億円、その内、４割が電気機器、１割強が食料品、１割弱が化学製品で、良港清水港に恵まれ、海外へ多くを出荷する一方、インバウンドにおいて、海外の豪華客船が入港するが、日本国内で唯一、富士山が展望出来る港でもある。是非、清水へお越し頂きたいとエールを送る。静岡商工会議所は、１３０００の企業法人会員を擁し、主に、経営支援、観光誘客、行政提言を行うが、今、特に力を入れているのが、デジタル化、カーボンニュートラル化、いわゆるグリーン化で、今後、インドと協力し、こうした共有目標に向けた取組を進める。

[redacted]浜松商工会議所会頭は、今回、初めてアーメダバード市を訪れた感動と、アーメダバード市はインド経済をリードする大変重要な都市であり、そのリーダーである経営者の皆様のお迎えへの感謝を伝える。更に、こうした機会を繋ぐ[redacted]氏への感謝を合わせて伝える。結びに、[redacted]浜松商工会議所副会頭を、インド国内における実績を有する、インド経済に貢献するソミック石川の経営者と紹介する。

中野祐介浜松市長は、[redacted]氏、アーメダバード経営協会皆様にお招きの謝意を伝える。グジャラート州、アーメダバード市は、成長著しいインドにあって、最も日本の伝統、文化に造詣が深く、日本的経営を学び、日本との絆、連携、ゆかりが深い所である。これも、浜松を代表する企業であるスズキが、グジャラート州に拠点を構えるご縁のお陰と考える。浜松市とアーメダバード市は、工業都市であり、似通った性格をもつ都市である。今、本市の凧がここにあるが、凧（カイト）はアーメダバード市でも有名な祭りであり、両市が連携、協力関係を一層深める事が、日本、インド両国の成長、更には世界の発展への貢

献に繋がる。今回の訪問を契機に、関係皆様にはこれからもご支援を頂き、両市の連携の一層強化を目指す。

◆全日本空輸(株)[redacted]インド総代表との意見交換会～１２月２５日（水）

【概要】

[redacted]氏は、1991年にANAに入社、パリ、北京、ムンバイの駐在を経て、現在、デリー支店長兼インド総代表を務める。駐在中のムンバイやデリーで出会った現地人の勤勉さ、明るさから、インド人の魅力を体感する。特に北東インドの人々の顔立ちがアジア人に近く、食生活や感性も日本人と似ており、文化面でも親和性が高いが、インド人は日本を知らない、日本人もインドを知らないことを痛感する。[redacted]氏は、こうした事を踏まえ、インド国内技能実習生送出し機関と接触し、情報収集を行うと共に、インパールやダージリン等のインド地方都市に直接出向き、多くの若者へのヒヤリングや日本の良さを説明する一方、日本国内では、地方自治体や宿泊、介護の業界団体等に、インド人材説明、講演活動を実施し、更に、実際に来印し、インド人の魅力を実感してもらう取組を行う。

こうした[redacted]氏が取り組む活動を通した、インド人材、インド国内の人材送り出し機関の現状等を伺い、本市への人材交流の可能性の高めを探る。

インドは、ムンバイ、デリー、バンガロール、ハイデラバード、アーメダバード、チェンナイ、コルコタ、スーラトの８大都市がTier 1(ティアワン)と呼ばれる人口400万人以上の都市であるが、合わせても人口１億人に満たない。残りの１３億人のインド人は、圧倒的に農村部にいる。インド人材の現状は、２０代若者等の若年層は就職難、一方、高度人材からワーカーまで世界中に人材を輩出する。インド人は、性格・資質は、温厚、誠実、明るい、日本語習得能力の速さ等の高い語学力、親日性、アニメ好き、日本人に似た顔つき、食習慣で、日本には、良好な二国間関係、安全で親切な国、町がきれい等のイメージを持つ。また、インドにおける送り出し機関は、アクティブな機関が少なく未成熟、他国への送出しのメリットが大きく日本を知らない、ブローカーの存在が無く、非常にクリーンな送り出しを行う。

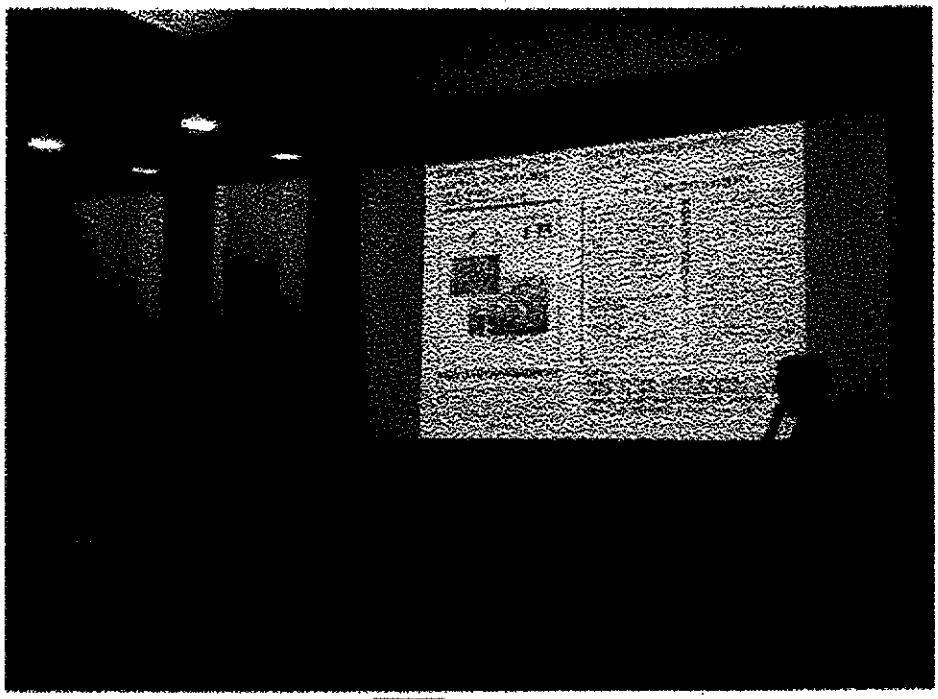
インド人材、送り出し機関等の現状を踏まえ、「インド人技能実習生・特定技能拡大に向けた取組」を行う。送り出し機関の実態把握では、送り出し機関33社中23社とミーティングを実施した結果、実績があるのは18社で悪質なブローカーの存在も無く、実習生の立場に立った対応で透明性が高いが、一方、日本の監理団体とのコネクションが未熟と日本での営業不足を指摘する。実習生総数拡大では、①送り出し機関との連携に向けて、定期的な情報交換と今後のプランの確認、日本の受け入れ団体・雇用者や他国の取組等に関する情報交換、インド各地でセミナーに登壇し日本の良さをアピールする。②インド及びインド人の理解促進について、日本アジア人財協会のニュースレターや月間インドへの寄稿または記事掲載、地方自治体（高知・福岡・和歌山・山形・鹿児島・鳥取・島根・大分・山口・神縄）、へのアプローチ、ＡＣＮ，ＮＮＡ、日経ビジネスに[redacted]インタビュー記事掲載、セミナー参加者へアプローチする。③直接的なアプローチについて、人材不足業界（宿泊・介護・農業・建設ｙ・パン製造等）へ直接アプローチ、経済団体・業界団体（経済同友会・商工会・宿泊団体・食団連・介護関連等）へアプローチ、セミナー参加者へアプローチする。④送り出し機関と監理団体・日本企業・雇用主とのマッチングについて、日本での営業力が乏しい

送り出し機関を監理団体等に紹介、日本のインド人実習生ニーズに合わせ、その分野に強い送り出し機関を雇用主や監理団体に紹介する。

技能実習制度の状況は、①日本経済に外国人技能実習生は不可欠である、②2019年末までに、日本は40万人以上の外国人技能実習生を受け入れるが、半分以上はベトナムから、他にフィリピン・インドネシア・中国・ミャンマー・カンボジア等でインドからは223人のみである、③ベトナム人技能実習生の失跡、ブローカーの暗躍、ネガティブな報道による外国人技能実習制度のイメージダウンする、④ベトナム人が3K業種を敬遠、人材の高騰により、代替国選定の準備が必要となる、⑤ASEAN諸国の人材が枯渇する、⑥ミャンマーの政権変更による将来への不安がある。法務省のデータでは、2022年3月のビザ発行再開以降、2023年6月末までに、日本は35.8万人以上の外国人技能実習生を受け入れ、特定技能は17.3万人となるが、インドからは1308人である。

インドにおける技能実習制度・特定技能の状況は、2017年10月～技能実習制度協力覚書、2018年7月～技能実習生第1期生初訪日、2021年1月～日印特定技能提携、2022年2月～介護試験開始、受験者伸び悩み、2022年3月～農業試験開始、2023年10月～宿泊業試験実施説明会開催（於 デリー）、2023年12月～建設業試験開始、2924年3月～宿泊業試験開始（於 デリー・ベンガル）と推移する。

具体的には、2023年、福井県・熊本県・高知県が初のインド人材（農業）受け入れ、2022年から2024年、日本旅館協会及び全旅連青年部へのアプローチとインドで特定技能試験開催、2022年、山形老人福祉施設協議会主催による介護インド人材説明会開催、その後、関係者インド視察、2023年、鹿児島経済同友会主催のインド人材講演会開催、インド実習生の可能性紹介する等の実績を重ねる。また、2023年、日印協会の月刊インド5号は、共同通信社の「インド人材後押し」記事をとりあげ、更に、日本の全国紙はその記事内容を掲載した。



全日本空輸(株)[redacted]インド総代表　取組説明

【所感】

中野市長は、浜松市のインド系住民は200人台で推移してきたが、昨年400人、2024度で800人程度に増加見込みを挙げ、インド人材交流、人的交流の拡大に向け、受け入れ環境の整備等を進める必要性を強調する。世界最大の人口を持つインドは、高度人材だけではなく、工場等の製造現場、医療、福祉、介護、観光、運輸等のサービス業分野、農業、林業、漁業の一次産業の人材も合わせた、様々な潜在力を有する。

[redacted]氏は、インド人は、家族を非常に大切にする民族性があり、長期単身滞在はなく家族帯同となるため、医療、教育等の社会環境の整備、充実が重要となる。そのため、病院における症状の説明、運転免許証の取得、車のリース提供、更にインターナショナルスクール設置等、「家族が生活しやすい都市としての機能を備える浜松」を選択すると助言する。

既に、国内で行われているインド人材活用事例を検証し、今を好機と捉え、本市が求めるニーズとインド人材とのマッチングが急務である。インドとの共生は近いか。

◆インド工科大学ハイデラバード校訪問（覚書締結他）～１２月２６日（木）

【概要】

インド工科大学ハイデラバード校（IITH）は、インド国内にあるインド工科大学（IIT）23校の一つで、1950年代に伝統校と言われる第一バッチの7校が設立された後の８番手として、IITHを含む8校が2008年以降に設立された。更に、2016年以降に7校が追加された。IITHは、伝統校に比べ、インフラ整備、教員採用が遅れているが、伝統校の7番目とランキングが一瞬逆転したことがある。ランキングが入学する学生の質に直結するため、良い学生による良い研究が大学ランキング上位へ繋げる事をIITHのシステムとする。イノベーション分野では、ランキングが伝統校よりも上で、インド全体で3番目、規模、キャパシティーでは太刀打ち出来ないところもあるが、勝つところは勝っていく事をハイデラバード校の方針とする。ハイデラバード校の学長は、筑波大学で研究者であった経歴を持ち、日本との連携に非常に前向きに取り組んでいる。

IITHは、教員数約320名、学生数5000人を超え、様々な学科があるが、コンピューターサイエンス・シビルエンジニアリング・電気工学を中心に現在約18学科と、大学院プログラム等を柔軟に作るシステムがある。IITHは、AIを重要な研究分野と捉え、世界で3番目にAI専門学科を作り、スマートモビリティ・ロボティクス等の研究者等、AI分野の権威と呼ばれる先生方が多く在籍する。

IITHは、土木・化学・機械工学等の伝統的なプログラムに加え、気候変動や文化遺産の研究、保護、IT系廃棄物等、社会課題に直接アプローチする学科、大学院のプログラムがある。世界中に、ある研究分野で最前線にいる権威と呼ばれる皆さんに声をかけ、「卓越教授」を依頼、日本からは、慶応義塾大学[redacted]教授、京都大学[redacted]教授の２人が就任する。

IITHは、特に、起業文化をどう醸成するかにかなりの力を割く。学生は、基本的に、ジョブマーケット、採用マーケットにおいて、シートを取り企業へ応募するが、シートの奪い合い、取り合いではなく、シートを新たに生み出し、他の学生が就職出来るような社長になれと指導する。更に、起業に向けたリードプロジェクトがあり、学生は、ビジネスになりそうな技術アイデアを提案、その内容の確かさを確認すれば、開発予算10万ルピーを受け取り、スタートアップする場合は、インキュベーションセンターに入って起業を進める。うまくいけば、大学での学位を取らなくても、卒業証書に代わる「終了証」を受領する。もし、会社運営に失敗しても、その年の新卒採用の就活が出来るセイフティネットがある。こうした、学生を守りながら、挑戦が出来るビジネスエコシステムを、IITHの特徴として力を入れる。

IITHは、JAPANdeskもあり、大学構内建物は、多くが日本政府ODAを活用、インキュベーションセンターと大事な建物は円借款で造られており、浜松市を始め、日本の企業や大学の積極的な活用を望む。



インド工科大学ハイデラバード校　構内

【所感】

IITH の卒業生は、日本の楽天・NTTAT アドバンステクノロジー・メルカリ・Yahoo 等で働く。また、毎年、JETRO が関わり、学生に向けた、JAPANDAY という日本企業を集めた日本企業への採用促進イベント、就職促進イベントをハイデラバード校大講堂で行うが、立ち見が出る位、日本企業への関心の高さが窺がわれる。前述のネクストパーラトの社長は、IITH の卒業生でスズキ(株)に就職５年で社長となり、学生にとっての夢でもある。インドは、日本を優しくて行ける国、アメリカを憧れの国だが行きにくい国と、国家風土を評する。

本市は、インド人材、人的交流の中、様々な産業分野で、いかにインド人材を活かすのか、そのノウハウをどのように水平展開するのか。IITH との関係構築に何を見出すのか。何を期待するのか。大切で重要な好機とする。

【概要 MOU 1】

「浜松市とインド工科大学ハイデラバード校との人的・経済交流に関する覚書」

日本国 浜松市長中野祐介氏とインド共和国 インド工科大学ハイデラバード校学長 [redacted] 氏は、2024 年 12 月 26 日、インド工科大学ハイデラバード校において、日本語及び英語による覚書各２部作成し、両者代表が基本合意書（MOU）に署名する。本覚書に基づく協力は、双方が本覚書に署名した日に発効する。今後、浜松市とインド工科大学ハイデラバード校は、相互理解と友好関係を深め、双方の人的・経済的交流促進に協力して取り組む。

中野祐介市長は、[redacted]学長が去年、今年と来日し、その際の有意義な会話が覚書締結への大きな一歩となったとした上で、本日の覚書締結は、浜松市とインド工科大学ハイデラバード校との新たな協力関係の扉を開き、特に、人材交流を中心とする協力関係の構築が、両者にとって大きな可能性に繋がると期待を寄せる。また、本締結にあたり、大変なお力添え頂き、橋渡しを担った[redacted]教授に謝意を伝える。今回の締結による協力関係を通して、浜松市内企業とIITH卒業生のマッチングや学生、研究者皆さんとの相互交流による知識、経験の共有等に大いに期待すると共に、グローバルな視点を備えた人材育成とその受け入れに、全力を傾注する。同時に、IITHの皆様にも、日本の文化や技術に触れる機会を提供出来る歓びも伝える。

中野祐介市長は、既に、ハイデラバード校と静岡大学は学生交流を始めており、また、来年、[redacted]教授に来日、浜松市へお越し頂き、本市の高校生向け講演を予定、次の時代の両地域を引っ張る若者同士の交流を深める。スズキイノベーションセンター（SIC）等を通して、本覚書による連携を、産業・経済の発展への貢献にも繋げる。



「浜松市とインド工科大学ハイデラバード校との人的・経済交流に関する覚書」調印

【概要MOU 2】

「浜松市とネクストバーラトベンチャーズとの覚書」

日本国 浜松市長中野祐介氏と※ネクストバーラトベンチャーズIFSCプラベートリミテッド ヴィプール・ナット・ジンダル社長は、2024年12月26日、インド工科大学ハイデラバード校において、日本語及び英語でそれぞれ2通の正本を作成し、両当事者が基本合意

書（MOU）に署名する。本覚書に基づく協力は、両当事者が本覚書に署名した日に発効する。今後は、両当事者間の産業交流促進と、浜松市をインドと日本産業連携の架け橋と位置付け、地域の産業成長への寄与に取り組む。※前述参照

両当事者は、①インドのスタートアップと浜松企業とのネットワーク構築、②スタートアップをはじめとするインド企業の市場調査と浜松市への進出促進、③浜松企業のインドへの市場調査と進出促進を推進するため、人材交流、知識共有、機会創出を行う。

中野祐介市長は、インドは急速な経済成長、イノベーション等において、世界的に注目を集めている中、同時に農村部を中心に様々な社会的課題もある。こうした中、ネクストバーラトが社会課題に対して、創造的なソリューションを生み出すベンチャー、スタートアップへの支援を行う、こうした様々な経験から浜松市が学ぶことが多い。今回の勉強を通して、単なる知識や情報交換に留まらず、実践的な人材交流を実施する。また、浜松市の経験をインドの課題解決に貢献し、インドで培った課題解決の手法を持ち帰り、浜松市を更に発展させていく。早速、来年度、浜松市職員をネクストバーラトへ派遣し、人事交流を進める。

ヴィプール・ナット・ジンダル社長は、バーラトはインドの公式名称であり、ネクストバーラトは「次の10億人」を創出するものであると強調する。ジンダル社長は日本での経験を通して、浜松地場企業の経営持続性に加え、やらまいか精神を身近に感じる感性を持つ。ネクストバーラトの主な活動を前述※で記述する。

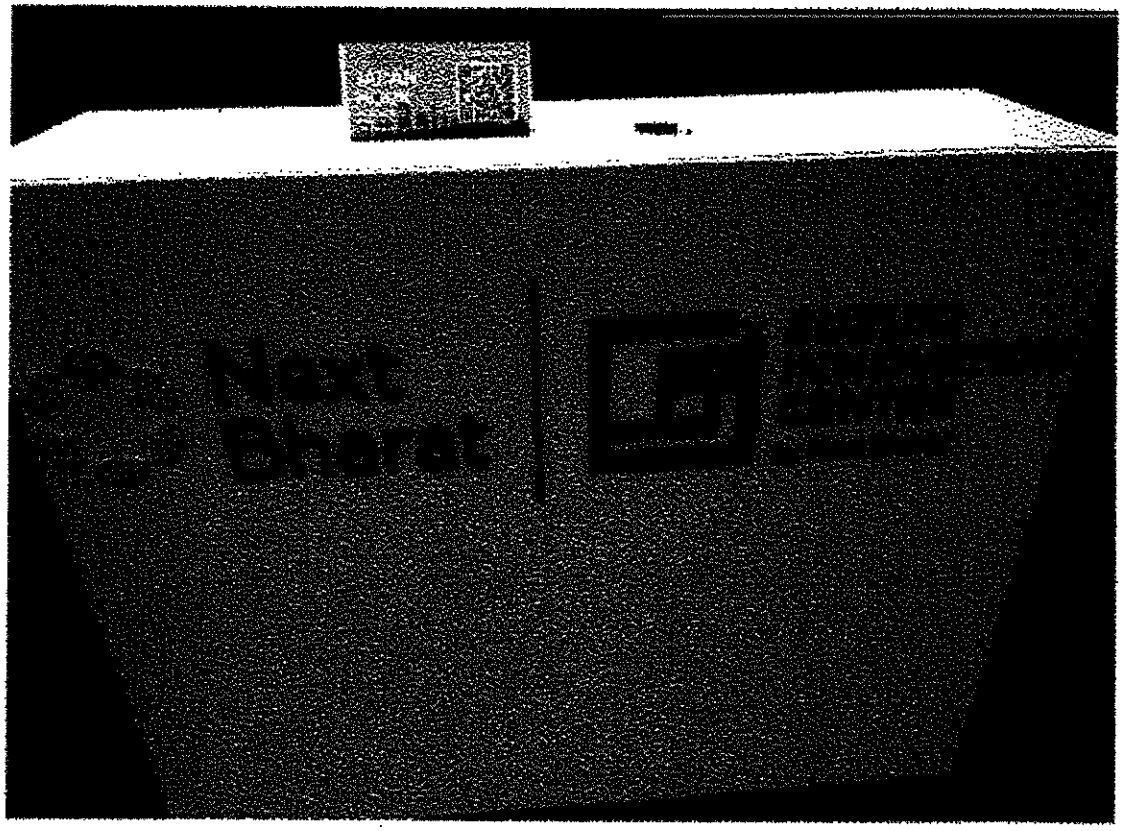


「浜松市とネクストバーラトベンチャーズ覚書」調印

◆スズキイノベーションセンター（SIC）IITH構内　～１２月２６日（木）

【概要】

SICは、スズキ(株)がIITHと共同で同校構内に開設した交流拠点であり、ネクストバーラトベンチャーズの組織の一部でもある。スズキエンジニア、IITHの教員、学生との連携による自動車同士の対話システム構築や、包括的な経済成長に向けた農村開発等での人材交流、情報交換を行い、研究開発や人材育成を繋ぐ。具体的には、１６人の教授が１４のプロジェクトに取り組む活動もあり、その中に、[redacted]教授も名を連ねる。また、インドの社会課題をビジネスの力で解決する事を目的に、グジャラート国際金融技術都市（GIFT CITY）内に拠点を設けるネクストバーラトベンチャーズの傘下に入り、ファンドを通して、農業、金融包摂、サプライチェーン、モビリティ分野等で活動する起業家への支援、投資を行う。基本的には、人材交流の拠点として、将来の共同研究や教育プログラム開発等の可能性を探る。



スズキイノベーションセンター（SIC）入口

【総括所感】

浜松市は、スズキ(株)100%子会社のネクストバーラトベンチャーズ及びインド工科大学ハイデラバード校（IITH）それぞれと「MOU」を締結する。一方、スズキイノベーションセンター（SIC）は、ネクストバーラトの部署の一つであり、IITH構内には事務所を構える。また、ネクストバーラトは、静岡県が「友好協定」を締結したグジャラート州における、先進的なグジャラート国際金融技術都市（GIFT　CITY）内に新たな拠点を開所する。こうした状況を踏まえ、ハイデラバード州・グジャラート州・アーメダバード市の相関を整理

し、浜松市内企業のインド人材ニーズ意向調査及びその実態に基づく浜松市としての役割が重要となる。浜松市は、「MOU」締結の好機を逸する事なく、インドとの連携を通して、産業、経済の持続的な発展、促進体制構築を図り、未来の浜松を創造する時である。

また、受け入れ環境整備の面から、市内在留国籍別外国人住民数は、2024年11月現在、ブラジル・ベトナム・フィリピン他30,077人であり、インドは683人で急速に増加し、高度人材328人とその帯同家族241人は合わせて569人で全体の約83%となり、日本語教育、インターナショナルスクール等への取組も急務である。

◆アップパールスタジアム視察　～１２月２６日（木）

【概要】

アップパールスタジアムは、テランガーナ州ハイデラバードにある国際クリケットスタジアムで、ハイデラバードクリケット協会が運営を担う。座席数 39,200、インドのプロクリケットリーグ「インディアン・プレミアムリーグ（IPL）」に参加する１０チームの一つ、サンライザーズハイデラバードの本拠地で、スタジアムのシーズンは、３月又は４月に開催し、５月に閉幕する７週間程度である。2008 年から始まった「インディアン・プレミアムリーグ（IPL）」は、インド国内外の企業が投資、世界最高のクリケットリーグとしての注目を集め、2023 年には平均観客動員数が 33,000 人を超える。1934 年、最初の国際試合を開催して以来の様々な歴史的な経過や、クリケット独特のルール、試合の仕組み等を伺う中、2001 年公開のインド映画「ラガーン」に触れた。この映画は、1893 年、イギリス領であったグジャラート州チャンパネールが舞台、ラガーンとは地税の事で、イギリスと村との間で地税の免除を賭けて行われたクリケットの試合の話である。1893 年、チャンパネールは前年から全く雨が降らず、村では不作が続くが、イギリス将校は年貢を２倍にすると告げる。村民は、直訴に行くが、将校がイギリス軍のクリケット試合観戦中のため、待たされるが、何をしているのか試合を全く理解出来なかった。直訴への答えを、「仕方ない」と言われ、村民は、「３ヶ月後にクリケットの試合を行い、村民が勝てば３年間年貢を免除、負ければ年貢を３倍とする」を提案する。しかし、11 人の選手も集まらない、ルールも知らない等、様々な試練を乗り越え試合を迎える。村人チームも素人としては頑張るが、イギリス軍の攻撃が激しく、絶対絶命、最後の打者まで追い込まれたが、イギリス軍のミスで、村人チームが勝利する。インドにとって、クリケットは象徴的な大切なものとなる。インドとパキスタンの試合では、お互いに対抗意識を持ち、パキスタンの工場は休み、インドの工場は休まないが、常時、試合状況を工場内で流す等、クリケットはインドの国民的スポーツとなる。

クリケットは、イギリス植民地時代にイギリス人が始めるが、次第に、インド上流階層やエリート層に広がり、インド都市部を中心に急速に浸透する。1947 年の独立後、インド国内で更に発展、自国文化の再確認の一環として、国民的スポーツの地位を確立する。インド国内では、リーグ戦、クラブチームの増加、インフラ整備が進む。現在、クリケット競技人口は、約３億人と言われる中、インドは、少なくても１億 5000 万人がいる、世界一クリケット競技人口の多い国と認知され、クリケットは、単なるスポーツを超え、インドの経済、文化に大きな影響を及ぼし、存在感を強める。

【所感】

クリケットは、インドの国民的スポーツへと高め、自国文化の醸成へも寄与する。スポーツが内在するポテンシャルは、インド発展に大きく貢献、今後も大きな牽引力を発揮すると予感する。インドにおけるクリケットの歴史、取組を、本市スポーツ政策の一助にと期待を込める。



アップパールスタジアム

インド視察報告書

自由民主党浜松
松本　康夫

■視察先■　スズキモーターグジャラート

■日　時■　２０２４年１２月２３日（月）１０：００～１２：００

■所　感■

アーメダバード市から約２時間半、バスで移動する道中では、広大で活気あふれるインドの風景が広がり、この国のダイナミズムを肌で感じることができた。今回視察したスズキモーターグジャラート工場は、まさにインドにおける日本企業の成功事例の一つであり、その背景には 40 年前にスズキ株式会社がいち早くインド市場の可能性を見出し、果敢に進出した歴史がある。

当時、自動車市場が未成熟だったインドにおいて、スズキは現地のニーズに即した小型・低価格の車を提供し、「徹底したローカライズ戦略」を展開。その結果、現在ではインド国内の自動車シェアにおいて約 42%という圧倒的な存在感を誇っている。

視察先の工場では、日本と同様の生産工程が導入されており、自動化が進む中でも品質管理には人的リソースが重点的に投入され、日本式の「ものづくり」の精神が浸透していた。教育・マナーに関する取り組みも徹底されており、現地の従業員が高いレベルの品質管理を実践している姿には強い印象を受けた。また、環境配慮の面でも最新の技術を導入し、持続可能な生産体制を築いている点は、今後の製造業のあるべき姿を示していると感じた。

こうした現地での成功を支えているのは、単なる技術の移転ではなく、人材育成や組織文化の共有といった「人」に対する投資であり、今後は本社で働くインド人材のさらなる増員も予定されているとのこと。本市が抱える製造業における人材不足の課題を考えると、スズキのように優秀な海外人材を積極的に活用する取り組みは、今後の地域づくりにも大いに参考になる。

浜松がグローバル人材の活躍できる地域として成長していくためにも、インドをはじめとする海外との連携を強化し、企業や自治体が一体となって受け入れ環境の整備を進めていくことの重要性を改めて実感した。

■視察先■　マンダル工業団地

■日　時■　２０２４年１２月２３日（月）１３：３０～１４：３０

■所　感■

マンダル工業団地では、ASTI や村上開明堂、ROKI といった静岡県内企業をはじめとする日本企業が数多く進出し、インド市場における展開を広げていた。特に注目すべきは、2017 年から開始された「プラグ&プレイ工場」の取り組みであり、日本企業向けの貸工場として、初期投資や立ち上げ負担を軽減しながらスムーズな事業展開を可能とする仕組みは、多くの企業にとって大きな支援となっている。

一方で、インド進出には依然として様々な課題も存在することが確認された。たとえインドのように広大な国土を有していても、工業用地の確保は容易ではなく、特に中小企業においてはサプライチェーンの構築や現地パートナーの協力が不可欠である。また、人材確保においても、ホワイトワーカーは採用に時間がかかり、労働環境によって離職率が高くなる傾向がある。ブルーワーカーに関しても、元来の農業中心の地域特性から、工業への理解や慣れが浅く、安定した人材確保には教育と定着支援が不可欠となっている。

そのような背景の中、マンダル工業団地内で実施されている人材育成事業は極めて重要な役割を担っていると感じた。今回視察した教育機関では、パソコンスキルや工作機械の基本操作に加え、安全・品質への意識を含めた「日本式ものづくり教育」が行われており、将来的には現場で指導的役割を担える人材の育成を目指していた。

こうした包括的な支援体制が整った環境は、インド進出を検討する日本企業にとって大きな魅力であり、今後も日本企業専用の工業団地に対する需要は高まり続けると予想される。また、豊田通商インディア社のように、進出時の煩雑な手続きを軽減し、人材育成や現地サポートを提供する存在は、日本企業にとって心強いパートナーである。

成長著しいインド市場への参入は、本市企業にとっても大きなビジネスチャンスであるとともに、グローバルな事業展開に向けた一歩となる。今後は、インドとの関係性をより強固なものとし、企業の進出を後押しする体制づくりを本市としても積極的に模索していく必要があると強く感じた。

■視察先■　グジャラート国際金融技術都市（GIFT　CITY）

■日　時■　２０２４年１２月２３日（月）１７：００～２１：００

■所　感■

今回視察したGIFT CITYは、モディ首相の肝煎りにより構想されたインド初の国際金融センターであり、インドで最も先進的なスマートシティとして注目されている。広大な敷地には国際関税地域や特別経済区が設けられ、今なお開発が進行中であったものの、アーメダバード空港からのアクセスの良さ、また将来的には新幹線ターミナルにも近接するという立地の優位性を兼ね備えており、インド経済の次なる中心地としての可能性を強く感じた。

GIFT　CITYの整備は、インドが2047年までに先進国入りを目指すという国家的目標の一環であり、IFSC（国際金融サービスセンター）を核として、経済インフラの基盤強化が進められている。ただし、今後さらに成長を遂げるためには、税制やインフラ、技術、人材育成など多くの課題解決が必要であり、日本の生産管理手法や人材育成の考え方がインドにとって大きなヒントとなると考える。

本市の企業にとっても、インド市場への進出・協業の可能性は大いに広がっている。特に、インドはICT分野の高度人材が豊富でありながらも、欧米志向が強いという現状がある。一方、日本、そして本市においては、まさにそのような人材が不足している状況にあるため、行政・企業・教育機関が連携し、インドとのつながりを強化していくことが極めて重要である。

また、今回の視察では、スズキ株式会社が支援するネクストバーラトベンチャーズ社の開所式にも参加することができた。これは、これまで十分に市場として注目されてこなかった「次の10億人（Next Billion）」と呼ばれる人々に焦点を当て、社会課題の解決と経済的価値創出を両立させるインパクト起業家の支援を目的とした取り組みである。紹介された事例からは、ビジネスを通して社会に変化をもたらそうとする起業家たちの強い意志と、インドの多様で複雑な現実が垣間見えた。

今後、本市が新たなビジネス機会を創出していくためには、こうしたインドの現状を的確に把握し、相互理解に基づいたネットワーク構築が不可欠である。インドとの協業を通じて、共に新市場の創造を目指す姿勢が、グローバル化が進む時代において本市の成長にもつながると確信した。

■視察先■　アーメダバード市長表敬訪問

■日　時■　２０２４年１２月２４日（火）９：００～１０：００

■所　感■

今回の視察の大きな目的の一つであったアーメダバード市との友好協定の締結は、残念ながらインド政府からの正式な許可が下りず、実現には至らなかった。しかしながら、浜松市とアーメダバード市は、将来の協定締結に向けて、人的交流や文化的連携、経済協力など幅広い分野での連携を進めていくことで一致し、大きな一歩を踏み出すことができた。

視察中には、中野祐介市長からアーメダバード市のプラティバベン・ジャイン市長へ、今後の協力を求める書簡が直接手渡され、両市の協力関係を築いていく強い意思が確認された。2025 年度中の協定締結を目指し、まずは人的交流や文化事業を通じて信頼関係を深めていくことが重要である。

浜松市とアーメダバード市は、凧揚げ文化をはじめとする共通点も多く、市民同士の交流の素地も整っている。また、浜松市ではすでにインドの教育機関・自治体・企業と連携した経済交流推進事業を展開しており、市内企業の海外展開支援や高度人材の受け入れにも力を入れている。こうした既存の取り組みを土台に、両市の関係をより実質的なものへと進化させていくことが求められる。

今回確認された協力関係は、単なる覚書を超えた、二つの都市が未来を共に描くための意思表示であり、異なる文化と経済圏が理解し合い、補完し合いながら成長するための礎である。この関係を確かなものとするためにも、今後の継続的な交流と具体的な連携事業の実施が鍵となる。

本市としても、インドとの関係強化を通じて国際理解を深め、市民の視野を広げるとともに、グローバルな経済活動への参加を促すための環境整備を進めていきたい。浜松市とアーメダバード市の絆が、持続可能で実りある国際交流モデルとなることを期待している。

■視察先■　グジャラート州政府訪問

■日　時■　2024年12月24日(火)11:00~14:00

■目　的■

グジャラート州政府と強固な関係を築くため、同州政府を訪問し州首相表敬や静岡県との友好協定締結式を行う。

■所　感■

今回の視察の目的である静岡県とグジャラート州との友好協定が、無事締結された。この友好協定により、グジャラート州と静岡県は経済的、文化的な結びつきを一層強化し、互いの発展と繁栄に寄与することが期待されている。特に、両地域の若者たちに新たな学びや経験の機会を提供することで、未来のリーダーを育成することができると思われる。

グジャラート州と静岡県の友好協定は、地域間の連携が国際的なレベルでどのように機能し、成功するか今後の動向を見守っていきたい。

【個人的所感】

今回の視察を通じて、静岡県とグジャラート州との間で友好協定が無事に締結されたことは、非常に意義深い成果であると感じた。この協定により、両地域は経済、文化、人的交流といった多岐にわたる分野での連携が一層深まり、互いの発展に寄与する強固な基盤が築かれることが期待される。

特に、両地域の若者にとっては、国境を越えた交流や学びの機会が創出され、異文化理解や国際感覚を育む貴重な経験となるだろう。こうした取り組みが、次代を担うリーダーの育成へとつながっていくことを大いに期待している。

この友好協定は、地方自治体間の国際連携がいかにして実効性を持ち、相互の発展を促進できるかを示す一つの好例となり得る。今後は、協定に基づいた具体的な交流・協力事業の展開が重要であり、継続的な対話と協働により、実のあるパートナーシップを築いていくことが求められる。

静岡県とグジャラート州の友好関係が、両地域に新たな価値と可能性をもたらすとともに、国際社会における地方の役割と影響力を高める好機となることを強く感じた。今後の動向を注視しつつ、本市としてもこの協定の成果を地域に活かすための取り組みを進めていきたい。

■視察先■　アーメダバード経営者協会（グジャラート州印日友好協会）

■日　時■　2024年12月24日（火）15:00~16:00

■目　的■

インドとの市民レベルでの友好関係を構築するため、音楽、美術、伝統芸能など文化的な交流及びアーメダバード経営者協会と静岡市及び浜松市の経済界の交流の可能性を探る。

【個人的所感】

AMA（アーメダバード・マネジメント・アソシエーション）は、これまで日本の教育機関や企業と連携し、経営者やビジネスパーソン向けの実践的な交流プログラムを継続的に展開してきた。その中で、日本式の働き方や経営手法を研修に取り入れ、両国間のビジネス文化に対する理解と尊重を深めてきたことは非常に意義深い。また、文化イベントやフェスティバルを通じて日本文化の発信と交流を推進し、相互の親近感や友好関係の強化にも大きく貢献している。

今回の視察を通じて、AMA と本市との関係は単なる交流にとどまらず、経済・文化・教育の三位一体となった持続可能なパートナーシップとして、今後さらに発展の可能性を秘めていることを強く感じた。AMA の活動は、国境を越えた人材育成や相互理解の促進において、先進的かつ実践的なモデルケースといえる。

今後は、より具体的な人材交流プログラムの構築や、本市の企業との連携をさらに強化し、地域経済の活性化にもつなげていきたい。また、文化・教育面でも市民が直接参加できるような交流の場を広げることで、相互理解の輪を一層広げていくことが求められる。

AMA との連携は、両国にとって実りある未来を築くための重要な架け橋であり、他の地域や国々にとっても参考となる国際協力の好例となるだろう。今後もこうした関係をさらに深化させ、多様な分野での連携強化を図っていきたい。